

わたしと

セミノール・パッチワーク



文と写真／小野山タカ子

なんとなく隠し事を持ったうしろめたさを、空港まで送りに来てくれた家族に感じながら、サンフランシスコへの飛行機に乗ったのは1981年の夏のことでした。仕事の都合で約2週間の米国滞在予定の間に、4日ほどの暇がつかれそうでしたので、かねて望んでいたセミノール・インディアン居留地への旅を実行しようと思い立ちました。セミノール・パッチワークの仕事しながら、まだ本場のものを見る機会がなかった私は、なんとか実物にふれてみたいという思いが日ごとにふくらんできていました。

「今回は、ちょっとフロリダのインディアン居留地へ行ってみたいと思ってるの」

「インディアンの居留地？ 何しに？」

「危ないことはないの？ よしたほうがいいよ」

思いがけない息子たちの反対にちょっとたじろいだ私ですが、西部劇程度の知識の彼らを説得するすべもなく、プランは私の胸の奥深く潜行していきました。

マイアミについてはいろいろ書かれていても、セミノール・インディアンについてはさっぱりで、こうなったらすべてはサンフランシスコでと、不安と期待を胸にいただいて出発したのです。

あこがれのインディアン居留地へのステップ

サンフランシスコでの最初の仕事はキルトの関係業者ばかりの会合で、参加者は広範囲に及んでいましたから、私はやっきにな

って情報を集めました。結果はかんばしくないものばかりでした。季節的にも夏のマイアミは、その暑さのためにシーズンオフということでした。失業者が多くてダウンタウンは危険であるとか、沼地の蚊がすさまじいとか、セミノール族の人たちは排他的で、きつとがっかりするだろうなどなど。私の心はカリフォルニアの空とは反対に、すっかり暗くなっていきました。

ところが、運よくブラドキン夫人(44ページ参照)が、この会合に来ていた、マイアミのキルト・ショップの経営者ジューン・サイモン夫人を紹介してくれ、とっかかりをつかむことができました。

闇夜のちようちんどころか太陽を見つけた思いで、シスコでの仕事を片づけると、荷物を友人の家に預かってもらい、身の回り品に日焼け止めクリーム、虫刺され防止剤と日よけの帽子を持ち、バッグ一つの軽装で、夜10時出発のマイアミ直行便に乗り込みました。早朝、マイアミ空港に降りた私は、さっそく空港近くのホテルにチェックインすると、朝食もそこそこに居留地へのルートさがしを始めました。幸い観光バスのコースにセミノール・インディアンのクラフトセンターが組み込まれているのを知り、翌日のコースの予約を入れてほっとしました。

翌日、私たちを乗せたバスは、見渡す限り広々とした原野の大きな空の下、タンパとマイアミを結ぶタミアミ・トレールと呼ばれる道を、西へ進んでいきました。バスが道の端に寄って止まる



と、運転手がそばの流れを指さして、ワニがいると教えてくれました。のんびり昼寝しているワニにも驚きましたが、その後たびたび見つけては教えてくれる運転手は、よくこのスピードであんな泥のかたまりかと思ええそうなワニを発見できるものだと、内心あきれてしまいました。

セミノール・インディアンのミニ・ヒストリー

ここで少しセミノール族について説明しておきましょう。昔ジョージアからアラバマ周辺にいたクリーク・インディアンの血を引く一族で、その後南下してきて、現地の種族や逃亡した黒人奴隷などがまじり、「野性の人」を意味する、セミノール(英語読み)となりました。

200年ほど前までは、他の種族と同じように毛や皮で作った服を着ていましたが、英国人との交流を通して、スコットランドのタータンチェックのスカートを手に入れ、その影響もあって、男性はワンピース風の服を着始めたようです。なにしろこの暑さなら男といえども、スカートのほうがずっと快適だと私も思います。

逃亡奴隷をかくまったり、新大陸が英国から独立するために起こした独立戦争では、英国側に加勢したこともあって、当時スペイン領であったフロリダが合衆国の手に渡ってからは、政府や南部の奴隷の持ち主たちから、ミシシッピの新しいインディアン領地への移住を迫られました。これに抵抗しつづけた勇猛果敢な一

族は、当初5000人いたといわれたのが、1850年代には200人ほどとなくなってしまいました。そして沼地の奥深くその姿を隠してしまい、狩猟や沼地のわずかな土地での農作物で暮らしていました。

世間がすっかり落ち着きを取り戻した今世紀初めに、彼らの手元にもミシンが入ってきました。そしてこのミシンを利用してひも状の布をつなぎ合わせた横縞が、男性用ワンピースや女性のスカートにとり入れられていきました。やがてこのピースにした縞を切り、またつなぎ合わせたパッチワーク風のものを作られました。

1928年、タミアミ・トレールが開通したことにより、いままでも孤立していた世界へ訪れる白人もふえ、ここでまた彼らの歴史の新しいページが開かれました。男たちはスカートをズボンにはきかえ、道路沿いの店でセミノール・パッチワークの施された服や人形、バスケット、木工品などを売ることを新しい収入源とするようになりました。

愛すべき彼女たちのクラフトマインド

今でもセミノール・インディアンたちは、とても保守的な生活を守っています。老人を敬い、自分たち家族のためには、すばらしいテクニックを駆使したパッチワークの服を作って着ています。

私が会った人たちは、男は原色を使ったパッチワークのバンドを数段つないだジャケットにズボン。女性はすばらしいパッチワ



⑤
 ークが施されたロングスカートに、上には薄い透き通った布でたっぷりギャザーの入ったケープをかぶっていました。このケープは蚊に刺されるのを防ぐ目的で、つまり一人用の蚊帳を身につけているようなものです。

服は一般的にだぼっとした直線裁ちですが、ギャザーがたっぷり入って動きやすく、そでつけのわきの下の部分には三角に折ったまちが入っています。

私の訪れたクラフトセンターでは、手工芸品類が売られているほかに、いろいろなデモンストレーションが行われていました。

私は観光客のとだえた間に、ミシンを踏んでいる女性に、自分がセミノールのパッチワークを見るためにはるばる日本から来た旨を英語で話しかけてみました。いままで黙々と目を伏せてミシンを踏んでいた彼女は、目を上げて笑いながら答えてくれました。

パターンには、大雨、稲妻、火などと名づけられているものもあるが、現在はとても複雑化してきたので、特別にパターン名を持たないなどと説明してくれました。彼女はまた仲間の女たちを呼んで、私のことを説明した様子でした。そしてみんな快く私の写真のモデルにもなってくれました。

短時間でしたけれど、私の胸は満足でいっぱいでした。彼女たちと話すことができ、着ているスカートにもふれることができたということは、私の予想以上にうれしいことでした。暑さも日焼けも忘れて、写真のシャッターを切りつけました。



⑥ さて、最近のアメリカ事情

翌1982年、テキサスで開催されたキルターの大会に参加した私は、ミシンピーシングがあたりまえになってきているアメリカでは、セミノール・パッチワークが日常のファッションの中にとり入れられてきているのを、まのあたりにすることができました。

会場でのプログラムの中にいくつかのファッションショーが組み込まれていました。特に布地メーカーが開催したショーはみごともので、その中でもパッチワークが持つ、プリント柄では表現できないボリュームのある質感には、オートクチュールの持つゴージャスな雰囲気さえ出ているのに驚かされました。

使われている素材も、綿、化繊、シルク、そしてベルベットにも及び、さまざまなテクニックもあわせて、リゾートウエアからパーティー向きのもので、独特な個性を発揮していました。

ミシンピーシングはカットが自在であるという特長がうまく利用され、セミノール・パッチワークの技法の応用も盛んです。大会の講習会の企画で、私が受講した、カリフォルニア州のロペルタ・ホートン夫人のアーミッシュのクラスでもこの手法がとり上げられており、手早く仕上がるパッチワークとして人気がありました。

このように、物にとらわれずに、自由に発想して作品を作り出していくアメリカのキルターの姿勢は、毎年のように訪米する私に、いつも勇気と刺激を与えてくれます。